

ヒタイト語の自他動詞対データと収集・分析の問題点

大亦菜々恵

omata.linguistics1@gmail.com

キーワード：ヒタイト語 自他交替 類型論

要旨

死語であるヒタイト語の自他交替のデータを Haspelmath (1993) の枠組みで収集する際に生じた、データの収集方法や語彙の選択、分類に関する問題点について論じる。まず、データの収集においては、特に死語の調査をする場合、関連する形容詞などから検索するなど、手法を工夫することで、より充実したリストを作ることができた。また、データそのものも分析していく中で、Luraghi (2010) の先行研究と比較すると、中受動態が有標であるかということについての考え方や、動詞リストを作成する際の語彙の選択によって結果が大きく変わることがわかった。言語間の比較を行う際には集計基準や語彙の選択を統一する必要性が示唆された。

1. はじめに

本稿¹では、ヒタイト語の自他動詞対を類型論的な枠組みである Haspelmath (1993) を用いて分析し、類型論的位置付けを試みる。同時に、既に絶滅してしまった言語のデータを集める際の手法、問題点等を考察する。

日本語では「開く」と「開ける」、「起きる」と「起こす」などのように形態的に関連づけられる非使役動詞と使役動詞の動詞対が見られるが、世界の多くの言語でこうした自他動詞対が観察できることが知られている。言語類型論の分野ではこうした有対自他動詞間の形式的関係や派生の方向、派生関係についての研究が活発に行われており²、その中で Haspelmath (1993: 90-92) は、有標性に着目した上で、自他動詞対の形式は派生関係から *causative*、*anticausative*、*non-directed* 型に分けられ、さらに *non-directed* 型は *labile*、*equipollent*、*suppletive* に分けられるという分類法を提示した。

(1) a. *causative*

非使役動詞が無標で、使役動詞が有標のタイプ。ヒタイト語の *hat-*「乾く」/*hat-nu-*「乾かす」など。

¹ 本研究は国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」による成果の一部である。

² 本分野の先駆けとなった Nedjalkov (1969)、Haspelmath (1993) を発展させ、自他交替の派生傾向は対格型や能格型といったアラインメントとの繋がりをもつと主張する Nichols et al. (2004)、自他交替のパターンの通詞的変化についての考察を行った Comrie (2006) などが本分野の研究例として挙げられる。

b. anticausative

使役動詞が無標で、非使役動詞が有標のタイプ。ドイツ語の *ändern* 「変える（他動詞）」/ *sich ändern* 「変わる（自動詞）」など。

c. labile (non-directed 型)

非使役動詞と使役動詞の形が変わらないタイプ。自他同形。英語の *break*, *melt*, *open* など。

d. equipollent (non-directed 型)

非使役動詞も使役動詞も有標性が同じタイプ。英語の *fall/fell* や、日本語の *atsum-er-u* (集める)/ *atsum-ar-u* (集まる) など。

e. suppletive (non-directed 型)

非使役動詞と使役動詞で全く異なる単語を用いるもの。補充法。英語の *die / kill* など。

Haspelmath (1993) はさらに 31 の非使役/使役動詞対の雛形³を作り、21 の言語からデータを収集し、それぞれの動詞対が anticausative 型の派成なのか、causative 型の派生なのか、もしくは派成に方向性がない non-directed 型なのかという分析を行った上で統計をとっている。31 の動詞対のうち、causative 型の数に対する anticausative 型の数の割合 (A/C 値) は言語ごとによって大きく異なる結果が出ている。Haspelmath (1993: 100-103) はヨーロッパ地域で話されている言語は語派にかかわらず A/C 値が高く、anticausative 型が優勢になることを観察し、自他交替の類型には語派よりも地域という要素が強く関わっていることを示唆した。

国立国語研究所では Haspelmath (1993) で提案された 31 の動詞対をもとに「使役交替言語地図 (The World Atlas of Transitivity Pairs, WATP)」の作成を進めており、本稿は WATP に提出したヒッタイト語の自他交替のデータについて先行研究との比較を行いながら分析を行うものである。

続く 2 節でヒッタイト語の類型論的特徴を述べ、3 節でヒッタイト語の使役接辞と、先行研究でも問題の多いヒッタイト語の中動態の扱いについて検討する。自他交替対のデータは現在も話者がいる生きた言語から収集されることが多いが、ヒッタイト語のような絶滅した言語ではどのような手法を用いるべきかを 4 節で扱う。そして得られた結果と、生じた問題点についてそれぞれ 5 節と 6 節で述べる。7 節で明らかになったことをまとめる。

2. ヒッタイト語について

ヒッタイト語は紀元前 1600 年から 1200 年までの約 400 年間アナトリア地方(現在のトルコ)で使用された、文証されている中で最古の印欧語であり、アナトリア語派に属する。文証されている 400 年の間に文法や語法がかなり変化していることから時代区分がなされており、古期ヒッタイト語、中期ヒッタイト語、新期ヒッタイト語と分けられている。すでに死語であるが、

³ 付表 1 を参照。

1906年にヒッタイト帝国の首都ハットウサ（現在名ボアズキョイ）が発掘されて以降、3万点を超えるヒッタイト語の粘土板断片が見つかっている。粘土板の上に楔形文字で刻まれている。

類型論的特徴として、ヒッタイト語は他の古い印欧語と同様、屈折語である。無標の語順はSOVで対格型の言語であるが、中性名詞を他動詞の主語として用いる場合には能格を示す接辞をつける現象が存在する。動詞は人称（一人称、二人称、三人称）、数（単数、複数）、態（能動態（以下 Act）、中受動態（Medio-Passive, 以下 MP））、時制（現在、過去）、ムード（直説法、命令法）にしたがって活用する。サンスクリット語やギリシャなどに比べると接続法や希求法、アオリストなどがなく、文法カテゴリーが少ない。受動は中受動態の形式を用いるよりも、動詞語幹から *-ant* という接辞で派成する分詞と、コンピュータ/存在動詞 *es-* を組み合わせて迂言的に表すことの方が多（Hoffner and Melchert 2008: 304）。アスペクトは動詞語幹に *-ske-* という未完接辞をつけて表すほか、完了は分詞 *-ant* と 'to have' に相当する *hark-* という動詞を組み合わせた構文によって表される。

3. 使役接辞と中受動態の扱いについて

ヒッタイト語の形容詞（と一部の名詞）と動詞には *-nu-* という動詞派生の接尾辞をつけることができる。*-nu-* は印欧祖語の **-new-/nu-* に遡ることができる。ヒッタイト語において *-nu-* は生産的である。形容詞につくと「～にする」という意味になり、動詞につくと「～させる」という意味になり、*causative* の機能をもつ。⁴

ヒッタイト語の中受動態の機能は複雑で、長らく議論が続いている。充実したコーパスを用いて中受動態の機能を分析した Inglese (2019, 博士論文) は、古期ヒッタイトにおいて、動詞は能動態か中受動態どちらかの活用しかもたないことが多く⁵、語彙的に選択されていたが、中期ヒッタイト語以降ではどちらの活用もする動詞が増え、能動態に対して中受動態は *Anticausative, Passive, Reciprocal, Reflexive* といった有標の *voice* の役割を担うようになったという通時的变化が起こっていると主張している。一方、ヒッタイト語の自他交替を扱った Luraghi (2012: 25) は、能動態か中受動態かが語彙的に決まっている場合はどちらが有標であると言うことはできないため、とくに時代差には言及せずに、ヒッタイト語の能動/中受動のペアは無指向型として扱うべきであるとし、集計でも *non-directed* 型としている。しかし、ヒッタイト語のコーパスのほとんどは新期ヒッタイト語のものであり、単語も新期ヒッタイト語でしか文証されていないものも多い。新期ヒッタイト語では出現頻度においても中受動態は有標であり、中受動態が能動態に対して二次的な *voice* を表すものに変化した後であると考えたほうが妥当であるため、今回の調査では新期ヒッタイト語の用例のみを用い、自他交替が能動態/中受動態のペアになっている場合は *anticausative* 型であると判断した。しかし一方で、現実には新ヒッタイト語においても、*media tantum* のような、中受動態しかもたないことが語彙的に定まってい

⁴ Hoffner and Melchert (2008: 175-179)。

⁵ 自発、無意識な動詞は中受動態のみをとることがあり、このように能動態の活用を持たない動詞のことを *media tantum* という。

る動詞が依然として残っているので、正確には新ヒッタイト語はヴォイス体系において過渡期的な状態である。この事実によって生じる問題点は5節で再び扱う。

ヒッタイト語の自他交替についての先行研究である Luraghi (2010, 2012) はそれぞれ Haspelmath (1993) と Nichols et. al. (2004) の枠組みに基づいてヒッタイト語の自他交替を論じたものであるが、Luraghi (2010) ではヒッタイト語の語彙の見つけにくさなどから Haspelmath (1993) の 31 の動詞対とは異なる語彙のリストが挙げられており、集計して A/C 値を算出し、他の言語と比較するには適さないデータ⁶となっている。本稿では新たに Haspelmath (1993) の 31 の動詞対のリストに従ったデータを作り、集計を取り直した。

4. 方法

方法としては、現在文証されているほとんどのヒッタイト語の単語を網羅したドイツ語との対訳辞書である Tischler (2008) を用い、ドイツ語の意味を入力してヒッタイト語を探す方法で検索した。動詞では相当するヒッタイト語の語彙が見つからない場合にも、関連する形容詞などを入れると検索結果にでてくることがあった。Tischler (2008) には用例が載っていないため、用例を網羅している *Hethitisches Wörterbuch* (HW²)、*Chicago Hittite Dictionary* (CHD)、*Hethitisches Etymologisches Glossar* などで用法を確認した。

5. 結果

今回収集した 31 の自他動詞対のデータを付表 1 に示す。まず、ヒッタイト語では 7. learn/teach, 16. begin (他動詞) に相当する単語が見つからなかった。ヒッタイト語の文書は儀礼、歴史文書、手紙などといった様々なジャンルが確認されているが、教育に関する資料が少なく、「勉強する」、「教える」というような単語は見つかっていない。また、16 のような開始を表現する際、動詞語幹に -wan という接辞をつけた目的分詞と、‘to put, place’ に相当する動詞 *dai-tiya-*を用いた構文を用いることがほとんどであり、inchoative にあたる単語がない。そのため、16 は O (Others : その他) として扱っている。また、4. wake up は自他ともに用例が動名詞形しか確認されていないため、Act、MP のどちらをとるのが不明である。7 learn/teach を除いたデータの集計結果は次のようになる。(集計方法は Haspelmath (1993: 101) を参考にした。)

⁶ 具体的には、Luraghi (2010: 144-146) は 32 の動詞対を挙げているが、そのうち 16 対は be warm/warm up, become/make drunk など Haspelmath (1993) の 31 の動詞対中に存在しない動詞である。また turn など同様の意味で複数の対がある単語に関しては、Haspelmath (1993: 101) は合計して 1 になるように対の数で割って調整しているのに対して Luraghi はそれぞれの対を一つとして数えている。例えば、10. turn には weh-/wahn- (causative 型) と nai-(MP)/nai-(Act) (anticausative 型) の二つの同じ意味の対が存在するが、Haspelmath は 2 で割ってそれぞれ causative が 0.5 個、anticausative が 0.5 個と集計しているのに対し、Luraghi はそれぞれ 1 として集計している。そのような例が 4 つあるため、結果として 29 種類の自他動詞対しかあげられておらず、Haspelmath のあげたペアに沿う例は 12 例となる。

表 1. ヒッタイト語の自他動詞対の割合

total	A	C	E	L	S	O	A/C	% non-dir.
30	11.5	11	2.5	1	2	2	1.05	25

Luraghi (2010, 2012) ではヒッタイト語は使役型が強く優勢とされていたが、語彙の選び方と中受動態の扱い方の違いにより、本稿の集計結果では *anticausative* と *causative* がほぼ同じ割合になった。Haspelmath (1993) では現代ヨーロッパの言語は *Anticausative* 型が優勢になりやすいことが報告されているが、地理的には小アジアに属し、また時代的に大きく離れた新期ヒッタイト語では印欧祖語由来の *-nu* 使役接辞が、古期ヒッタイト語に比べても生産的になっており、かつ中受動態も広く使われるため、A/C は拮抗している。

ヒッタイト語は最も早く印欧祖語から枝分かれしたアナトリア語派に属するため、現代ヨーロッパ語と異なる傾向を持っていても不思議ではない。Comrie (2006) は、印欧語と濃密に接触しているマルタ語と正則アラビア語やウラル語族言語のデータなどから A/C の傾向は語順などに比べると、言語接触をうけても通時的にある程度変化しにくいものであると指摘しているが、約 3000 年以上離れるとその限りではない可能性がある。ヒッタイト帝国内では系統不明のハッティ語やフリ・ウラルトゥ語族に属するフリ語も使用されていたため、言語接触による影響も考えられる。⁷

6. 問題点

3 節でも述べたとおり、ヒッタイト語の中受動態は通詞的变化が起こっているため、分析が難しいケースが存在する。例えば 26. *gather* は、*tarupp-* (MP) 「集まる (自動詞)」/ *tarupp-* (Act) 「集める (他動詞)」という動詞対で、新ヒッタイトでは明らかに能動態/中受動態のペアになっており、*anticausative* 型であると判断できる。一方、1. *boil* の対では、*zēya-* (MP) 「沸く (自動詞)」/ *zanu-* (Act) 「沸かす (他動詞)」となっており、動詞の屈折の観点から 26. *gather* と同じく *anticausative* 型のように見えるが、*zanu-* は語基 *zēya-* から *-nu*-使役接辞で派生しており、派生の観点からは *causative* 型のように見える。さらに両方を考慮すると *equipollent* 型とも捉えられる。この場合、*zēya-* 「沸く (自動詞)」は古ヒッタイト語から新ヒッタイト語にかけて常に中受動態のみをとる *media tantum* であり、*zanu-* 「沸かす (他動詞)」のような *-nu*-使役接辞で派生した動詞は能動態をとることが普通のため、この場合の中受動態/能動態の対立は、古ヒッタイト語において態が語彙的に定まっていた頃の名残と考えるのが妥当である。よって、1. *boil* のような例は屈折の対立を考慮せず、使役接辞による派生によって自他の対立が表されていると考え、*causative* 型として扱った。

⁷ Yakubovich (2010: 45-53) はヒッタイト語と同じアナトリア語派に属し、ヒッタイト語と並ぶほど広くヒッタイト国内で使用された言語であるルウィ語の社会言語学的研究であるが、複数所有マーカの観察から、キズワトナというルウィ人とフリ人が共生していた地域では言語接触が生じていたことを示唆している。ルウィ語とヒッタイト語もまた接触によってお互いに強く影響し合っていることが知られている。(Yakubovich 2010, Rieken 1994 など)

2. freeze, 25. change は equipollent であるが、これはどれも形容詞を語基に inchoative では-es、causative では-mu-使役接辞がついたものである。また、29. close は hatk-という他動詞から hatku-という形容詞が逆生によって生まれ、それに-es という inchoative の接辞がついている (HW²H: 512) ため、O として扱った。これらは Haspelmath (1993: 99-100) で扱われている語源によって型が決まっているケースに相当する。17. spread, 30. split では語彙としてそれぞれ他動詞の *ispar*、*iskalla*-は存在するものの、中受動態はほぼなく、分詞+コピュラ動詞の受動態を用いて inchoative に相当する事象を表現するため、anticausative のペアとして認めてもいいのかという問題もあった。さらに、9. stop と 28. break に関しては labile と causative のペアが存在しているが、これは大亦 (2016, 2017) で扱った、他動詞に-mu-という使役接辞がつく現象に関する動詞対である。ヒッタイト語では他動詞に使役接辞がついても結合価が増えることがないのだが、labile の動詞は新期ヒッタイト語以降他動詞であることを明示するために-mu-という接辞をつけるようになるという通時的変化があり、新期ヒッタイト語の時点では labile のペアと使役形が混在している。

Haspelmath (1993: 103-108) では事態が自然発生しやすいものが causative 型、自然発生しにくいものは anticausative 型になりやすいという類象性と関連した現象が報告されている。付表 1 のリストは 1 「沸く」「沸かす」から 3 1 「死ぬ」「殺す」まで、自然発生しやすい現象から順に並んでいる。ヒッタイト語でも付表 1 の 1～9 までは causative 型が優勢で、10 以降は anticausative 型が優勢になっており、概ね通言語学的な傾向にあてはまっている。

7. おわりに

ヒッタイト語は古期ヒッタイト語と新期ヒッタイト語で動詞体系に変化があったことが中受動態や使役接辞の研究などから明らかになっているが、古期ヒッタイト語の資料は限られているため、ヒッタイト語内での時代差による自他動詞対の傾向の変化までをとらえることは難しく、今回は新期ヒッタイト語のみを扱った。Luraghi (2010) の先行研究と比較すると、中受動態が有標であるかということについての考え方や、動詞リストを作成する際の語彙の選択によって大きく結果が変わることがわかった。言語間の比較を行う際には集計基準や語彙の選択を統一する必要性が示唆された。また、そもそも Haspelmath (1993) に挙げられた雛形が適切なものであるかについても再考する必要がある可能性がある。データの収集の方法に関しても、特に古い言語の調査をする際などには関連する形容詞などから検索するなど、手法を工夫する必要があることが明らかになった。

参考文献

- CHD = *The Chicago Hittite Dictionary*. 1980ff. Chicago: The Oriental Institute of the University of Chicago.
- Comrie, B. 2006. Transitivity pairs, markedness, and diachronic stability. In *Linguistics* 44 (2), 303–318.
- Güterbock, G., Hoffner, H., and Hout, Theo P. J. van den. 1989ff. *The Hittite Dictionary of the Oriental*

- Institute of the University of Chicago*. Chicago: The Oriental Institute of the University of Chicago.
- Haspelmath, M. 1993. Change-of-state/causative verb alternations. In *Causatives and Transitivity*, edited by B. Comrie and M. Polinsky. Amsterdam & Philadelphia: Benjamins, 87–120.
- HW² = Friedrich, J., Kammenhuber, A. and Hoffmann, I. 1975ff. *Hethitisches Wörterbuch*. 2nd ed. Indogermanische Bibliothek. 2. Reihe: Wörterbücher. Heidelberg: Winter.
- Hoffner, H. and Melchert, C. 2008. *A Grammar of the Hittite Language*. Winona Lake: Eisenbrauns.
- Inglese, G. 2019. *The Hittite Middle Voice*. (dissertation)
- Luraghi S. 2010. Transitivity, intransitivity and voice in Hittite. In *Indoeuropejskojeazykoznanie i klassiceskaja filologija –XIV*, vol. 2, St. Petersburg: Nauka, 133–154.
- _____. 2013. Basic valency orientation and the middle voice in Hittite. In *Studies in Language* 36:1, 1–32.
- Nichols, J., D. Peterson and J. Barnes. 2004. Transitivity and detransitivising languages. In *Linguistic Typology* 8 (2), 149–211.^[17]_[SEP]
- Rieken, E. (1994) Der Wechsel *-a/-i-* in der Stammbildung des hethitischen Nomens. *Historische Sprachforschung* 107: 42-53.
- Tischler, J. 1977ff. *Hethitisches Etymologisches Glossar*. (*Innsbrucker Beiträge zur Sprachwissenschaft*, Bd. 20). Innsbruck: Institut für Sprachen und Literaturen der Universität Innsbruck.
- _____. 2008. *Hethitisches Handwörterbuch – Mit den Wortschatz der Nachbarsprachen*. 2., vermehrte und verbesserte Auflage. (*Innsbrucker Beiträge zur Sprachwissenschaft*, Bd. 128). Innsbruck: Institut für Sprachen und Literaturen der Universität Innsbruck.
- Yakubovich, I. (2010) *Sociolinguistics of the Luvian Language*. Leiden: Brill.
- 大亦菜々恵 (2016) 「ヒッタイト語の使役機能を持つ接辞-*nu-*と通時的変化」『東京大学言語学論集』37: 217-238.
- 大亦菜々恵 (2017) 「ヒッタイト語動詞接辞 *-nu-* の他動性明示用法—「被使役者を明示しない使役」の機能は存在するか—」『東京大学言語学論集』38: 221-232.

付表1 (略語 MP: 中受動態 ACT: 能動態)

	Haspelmath (1993: 104) Table 4, 31 pairs ranked in the ascending order of A/C ratio	Non-causative	Causative	Type of morphological relation
1	boil	zēya-(MP)	zanu-(ACT)	C
2	freeze	ekunes-(ACT)	ekunahh-(ACT)	E
3	dry	hat-(ACT)	hatnu-(ACT)	C
		hates-(ACT)	hatnu-(ACT)	E
4	wake up	arriya-	arnu-	C
5	go out/put out	kist-(MP)	kistanu-(ACT)	C
6	sink	maus-(ACT)	pessiya-(ACT)	S
7	learn/teach			
8	melt	sarrai-/salliya-(MP)	sallanu-(ACT)	C
9	stop	kars-(ACT, MP)	kars-(ACT, MP)	L
		kars-(ACT, MP)	karsanu-(ACT)	C
10	turn	weh-/wah-(ACT, MP)	wahnu-(ACT)	C
		nai-(MP)	nai-(ACT)	A
11	dissolve	marra-(MP)	marra-(ACT)	A
12	burn	war-/ur-(MP)	warnu-(ACT)	C
13	destroy	hark-(ACT)	harganu-(ACT)	C
		hark-(ACT)	harnink-(ACT)	C
14	fill	suwai-(MP)	suwai-(ACT)	A
15	finish	zinna-(MP)	zinna-(ACT)	A

ヒットイト語の自他動詞対データと収集・分析の問題点

16	begin		dai-/tiya- + Supinum; ep-	O
17	spread	isparant es-	ispar-(ACT)	A
		isparant es-	isparnu-(ACT)	C
18	roll	nai-(MP)	nai-(ACT)	A
19	develop	miya-(ACT)	miyanu-(ACT)	C
20	get lost/lose	mer-/mar-(MP)	mernu-(ACT)	C
21	rise/raise	karp-(MP)	karp-(ACT)	A
		ninink-(MP)	ninink-(ACT)	A
		park-(MP)	park-(ACT)	A
22	improve	lazziya-(MP)	lazziya-(ACT)	A
23	rock	katkattiya-	katkattinu-	C
24	connect	hamenk-/hamank-(MP)	hamenk-/hamank-(ACT)	A
25	change	tameumes-(ACT)	tameumahh-(ACT)	E
26	gather	tarupp-(MP)	tarupp-(ACT)	A
27	open	has(s)/hes(s)-(MP)	has(s)/hes(s)-(ACT)	A
28	break	parsiya-(MP)	parsiya-(MP)	L
		parsiya-(MP)	parsiyanu-(ACT)	C
29	close	hatkues-(ACT)	hatk-(ACT)	O
30	split	iskallant es-	iskalla-(ACT)	A
31	die/kill	ak-(ACT)	kuen-/kun-(ACT)	S

Data Collection and Analysis of Transitivity Pairs in Hittite

Nanae Omata

omata.linguistics1@gmail.com

Keywords: Hittite, transitivity, typology

Abstract

This paper discusses the problems that arose in compiling data on transitivity pairs in the dead Hittite language within the framework of Haspelmath (1993) regarding data compilation, vocabulary selection, and classification. Firstly, in collecting data, especially in the case of investigating dead languages, a more comprehensive list could be created by devising methods, such as searching from related adjectives and other words. In comparison with Luraghi's (2010) previous study, I found that the results varied significantly depending on the idea of whether the mediopassive is marked and the choice of vocabulary used to create the verb list. It was suggested that there is a need to unify the criteria and the lexical selection when making comparisons between languages.

(おおまた・ななえ 東京大学)